

プラテュス *πλατύς*



- ◆巻頭言 博士後期課程が設置されて—恩師の言葉— 1
大学院保健科学院副学院長・教務委員会委員長 伊達 広行
- ◆研究室紹介 「創成看護学分野 公衆衛生看護学・在宅看護学グループ(地域看護学)」 2
創成看護学分野 教授 佐伯 和子
- ◆新任教員紹介 3
病態解析学分野 特任准教授 惠 淑萍
- ◆海外便り Ohio State University 4
病態解析学分野 助教 松尾 淳司
- ◆保健学科学友会“クリスマスのつどい”を終えて 5
保健学科学友会クリスマスのつどい実行委員長 看護学専攻3年 菅野 未佳子
- ◆報告事項 6

博士後期課程が設置されて—恩師の言葉—

大学院保健科学院副院長・教務委員会委員長 伊達 広行



2010年4月、大学院保健科学院に念願の博士後期課程が設置されました。これをもって、検査技術学と放射線技術学をも含む総合的な保健科学系の博士養成課程が、北海道で

初めて誕生するとともに、北海道大学内の他部局と同様、最上位の教育課程までが完成したことになります。

北海道大学が標榜する大学院大学としての役割をしっかりと果たすべく、教員が一丸となって、大学院生と共に研究活動を促進していかななくてはならないことはいまでもありませんが、博士・修士といった称号を耳にすると、私がいつも思い出す恩師の言葉があります。その先生（故 深井一郎教授）は、私が修士課程を修了する際の副査の一人であり、ご健在であれば博士号の審査でも副査となられたであろう方ですが、残念なことに在職中にご逝去されました。博士号へ向けて論文を書いている頃、先生は私にこう問いかけられました「博士号を取得するということが、どういうことか分かるかね」と。それに対して私がどう返答したかは全く覚えていませんが、先生が次のようなことを言われたことを忘れることはできません。「博士号の取得とは、博士課程の学生を指導する能力に到達することである。同様に、修士は修士課程の学生を、学士は学部生を指導できるということを意味する」。この禅問答にみるような明快さに、目からうろこの感がありましたが、一方で「これは大変なことだ」と思いました。つまり、博士号を取得した後は、世界のどこへ行っても「博士」（もしくは「Ph.D.」）として扱われ、一人の独立した研究者としてみなされると同時に博士課程の学生を指導できなくてはならないことになります。研究テーマの選択、計画と実施、英文を含めた論文執筆とその投稿、査読者とのやりとりに至るまでの一連の遂行能力と、その分野を指揮する力量が問われるのです。指導教授から幾度となく英文論文の添削を受けていた私

は、「もし明日から国外で博士課程の学生の面倒をみるなんてことになったら...」という架空の状況を想像し、自らの浅学非才・非力と博士号の重さを痛感したのです。

このような捉え方の称号は、数学で言うところの十分条件であり必要条件ではありません。しかし、それだけにより一層、単なる肩書きではない真の力が要求されることになると思います。国内の大学進学率が50%を超え、北大内の博士課程在籍数がここ20年で3倍に増加した今日、博士号も（修士号も）大衆化した称号かもしれませんが、その規準をしっかりと担保しなくてはならないはずで。ちょうどこの文を書いている頃（2010年12月）に出席した国際会議にて、ICRP（国際放射線防護委員会）のVice-ChairmanであるAbel J. González博士は、講演の中で「科学者に最低限必要なことは、読むことができることと書くことができることである」と言いました。「それは、初歩的なことである—しかし多くのことを求める」と後に続くのですが、論理性を基盤とする科学の世界でも、例えば疫学や統計学が関わってくると、認識や判断の相違によって、相互の理解や説得が困難になることがあります。保健医療や環境学などにおいて、さらに政治的な要素が加わろうものなら、どのようなことになるか想像に難くありません。本学院の卒業生がいかなる分野に進もうとも、堂々と国際社会で渡りあっていくには、結局のところ、専門分野での独創性はもちろんのこと、実質的なコミュニケーション能力と自国の歴史・文化に対する深い理解が不可欠となると思います。情報を入手することが極めて容易となった現代、夜郎自大は恥かしいことである一方、韜晦する余裕などないことも事実です。過大でも過小でもない姿を公開しつつ、自己の信念に則って誠実に研究活動を展開していくことが最良の道だと信じます。

本学院の修士・博士後期課程にいる学生の皆さんが、十分な力を身につけられる「場」を提供できるよう、精一杯の努力を尽くす所存です。

創成看護学分野 公衆衛生看護学・在宅看護学グループ(地域看護学)

創成看護学分野 教授 佐伯 和子

地域看護学は公衆衛生看護学と在宅看護学で構成されています。公衆衛生看護学は、地域(地域社会、事業場、学校)に暮らし働く人々の健康や生活とそれに関連する要因を明らかにし、保健師の支援技術の確立や地域の健康システムの構築に寄与しています。在宅看護学は、障害や疾病を持ちながら生活する人や家族のケアおよびケアシステムの確立をめざしています。

生まれる前から死に至るまでの個人と家族の健康すべてに生活者の視点で関わるのが、地域での看護です。また、集団および地域社会や組織を対象にしたダイナミックな活動も大きな特徴です。広い視野を持った看護職を育成したいと学部および大学院教育をしています。

グループの構成は、教員は教授(佐伯)、准教授(河原田)、助教(平野、本田)、1名欠員です。院生は、修士課程M2(實吉、宮田、加藤、森本)、博士課程(工藤、久保田、高島)で4名が社会人です。

研究テーマは多様ですが、大きく5つに分類できます。研究方法は、質問紙調査法、質的研究方法が主で、実態調査、介入研究、アクションリサーチなどがあります。

1. 高齢者、障がい者に関する研究: 健康な高齢者、虚弱な高齢者を対象にした研究が多く、要支援高齢者の社会活動の特性の明確化を基にした介護予防や閉じこもり予防、居住移動した高齢者の地域社会への適応、認知症の高齢者と家族の適応を促す地域づくり、介護保険に関しては、サービス未利用者への介護予防対策と効率的な認定申請について検討しています。

障がい者を対象にした研究では、保健所での高次脳機能障がい者の「家族の集い」の活動のアクションリサーチ、また、人生の途中で身体障がいを持つことになった高齢者の生活経験を現象学的アプローチで明らかにしています。高島さんは第2回北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテストで、総長賞(最優秀賞)を獲得しました。

2. 産業保健、生活習慣病に関する研究: 職場のメンタルヘルスとストレスマネジメント研究では、予防に視点をあてたストレスマネジメントの介入研究を行っています。河

原田先生は第4回国際地域看護学会でベストオーラルプレゼンテーション賞を獲得しました。生活習慣病に関しては、1型糖尿病患者のインスリン自己調節のためのケアプログラムの開発を行っています。

3. 地域づくり、ソーシャルキャピタルに関する研究: 地域での子育て支援、メンタルヘルスをテーマに、地域の絆の測定、他者への信頼を測定するための尺度開発を行っています。また、地域づくりのためには、地域をアセスメントする技術が基盤になるので、そのためのアセスメント方法論の開発について取り組んでいます。

4. 保健師教育、現任教育など人材開発の研究: 保健師教育に関しては、保健師教育課程の評価、地域看護学実習の効果的なあり方、保健師の政策能力獲得のための基礎教育プログラムの開発を行っています。さらに、行政機関に勤める保健師の実践能力の構造と期待されるレベルを明らかにし、新任期の保健師の現任教育、指導者育成の現任教育プログラムの開発を介入研究として行っています。

5. その他の共同研究: 保健師の倫理的実践に関わる自治体組織のエスノグラフィー、事例分析による乳幼児の虐待事例・虐待リスク事例における父親の特性と心理社会的要因、青壮年期の高脂血症予防のための行動科学に基づく介入プログラムと効果に関する研究に共同研究者として参加しています。

社会活動では、保健師の現任教育における人材育成、職場のストレスマネジメントの研修会など、研究の成果を基に実践現場との連携を図り、現場のサポートをしています。

研究室での学習活動として、抄読会とリサーチミーティングは、社会人院生の参加を考慮して、第2・4の木曜日の夜間に行っています。

今後に向けての大きな課題は、国際的に通用する研究を発信できるようになること、研究フィールドを育て縦断研究に取り組めるようにすることです。また、北海道の、日本の、世界のリーダーとなれる看護の人材を育てたいと頑張っています。



公衆衛生看護学・在宅看護学グループ(地域看護学)



リサーチミーティングの様子

新任教員紹介

病態解析学分野 特任准教授 惠 淑萍



惠 淑萍(けいしゅくへい、Hui Shu-Ping)と申します。

中国西安(唐の都の長安です)の出身で、西安医科大学を卒業し、北京の首都医科大学付属病院にて循環器内科医として勤めました。1997年に留学先の北海道大学医学研究科(小林邦彦教授)でコレステリルエステル転送蛋白(CETP)欠損症の中国人第1例をアメリカの遺伝学雑誌に報告し、更に日本人と中国人のCETP欠損症の表現型の違いに関する研究を行い、北大から博士(医学)を授与されました。帰国後は、北京にある中国衛生部(日本の厚生労働省)の臨床検査中心(臨床検査の全国標準化の中心)の臨床化学部門に勤務し、日立製の大型生化学検査装置を使って酵素試薬を扱っていました。1999年に日本学術振興会外国人特別研究員に採用されて再来日し、北海道医療大学薬学部薬品分析化学講座(後に生命物理科学講座に名称変更)で過酸化脂質の化学合成・機器分析の研究を開始しました。同講座の黒澤隆夫教授のご厚意により2001年に助手に採用され、2006年より講師として、薬学部と薬学研究科の臨床化学講義と分析化学実習を担当してきました。2007年から本研究院の千葉仁志教授のご推薦で文部科学省知的クラスター創成事業に参加していますが、その中で北大に設置された最先端の質量分析装置(Orbitrap LC-MS)を用いるチャンスが与えられましたので、2010年11月から本研究院の病態解析学分野で特任准教授として研究を行っています。

【主な研究内容】

1. 過酸化脂質の研究

動脈硬化の初期病変でマクロファージの泡沫化の原因となるのは低比重リポ蛋白(LDL)ではなく酸化LDLです。また、メタボリックシンドロームに合併しやすく日本で100万人が罹患している非アルコール性脂肪肝炎(NASH)では、脂肪肝に加えて酸化ストレスが発症に必要です(Two-hit theory)。これらの過程で鍵物質となる過酸化脂質は、化学的に不安定であるため、適切な内部標準物質を合成し、内部標準法により測定する必要があります。しかし、これらの物質の合成は困難で、それが臨床化学的研究を阻んできました。私は10年ほど前から過酸化脂質の化学合成に取り組み、系統的にコレステリルエステル過酸化物、トリグリセリド過酸化物、リン脂質過酸化物、遊離脂肪酸過酸化物の合成法を完成し、数多くの標準品と内部標準品を合成しました。それらの血中濃度を化学発光HPLC法、近年では質量分析法で測定する方法を確立できました。今後は、世界的な情報発信センターとして、また、他の研究者への測定サービス提供を通じて、過酸化脂質研究に貢献したいと考えています。

2. プラズマローゲンに関する研究

プラズマローゲンは、脳・心臓・肝臓・血漿リポ蛋白等に存在するリン脂質です。アルツハイマー病早期から血中プラズマローゲンが減少している事実が2007年に発見され、病因論的に注目されています。プラズマローゲンは、構造中にビニルエーテルと多価不飽和脂肪酸を含むために易酸化性が強く、酸化ストレス下で壊れてしまいます。しかし、その化学的性質が細胞や組織の酸化障害を軽減し、生体では内因性抗酸化脂質として働くと考えられています。プラズマローゲンの化学合成と測定は非常に困難で、世界的に研究論文数は伸び悩んでいます。私は、過酸化リン脂質研究で得た知識と技術をもとに、プラズマローゲンの化学合成法を確立し、血漿プラズマローゲンの新規測定法を特許出願しました。この方法は、プラズマローゲン測定の標準法となり得るもので、千葉研究室が開発中のプラズマローゲン簡易測定法に対して科学的根拠を与えるものです。今後は、本研究院がプラズマローゲン分析の世界的センターとしての役割を受け持つとともに、酸化リポ蛋白代謝や組織酸化ストレス代謝との関連で臨床応用を進めるのに、私のプラズマローゲン研究を役立てたいと考えています。

3. その他の研究

TVのCMでお馴染のウコンは、クルクミン類と呼ばれるポリフェノールを主成分としています。私はクルクミン類の内部標準物質を化学合成し、血中クルクミン類のHPLC測定法を確立しました。機能性食品は、その著しい普及に比べて安全性・薬理効果・動態学に関係する研究が疎かであり、時に社会問題となります。食品臨床化学の発展は社会的に期待されている分野で、私も関心をもっていきたいと思います。また、千葉研究室の原発性アルドステロン症(PA)研究にも参加しています。PAは手術で治る高血圧で最多の疾患であり、高血圧全体の数%がPAによることが近年の研究で明らかにされています。私は、PAのマーカ物質である18-ヒドロキシコルチゾールを質量分析法で測定するための新規な内部標準物質を化学合成しました。これからの臨床応用の成果に期待しています。

最後になりますが、保健科学研究院では、医学・保健学、合成化学、分析化学の上に立つ新しい臨床化学を創りあげていくために努力してまいります。また、保健科学研究院の皆様のご研究に何らかの形で協力できたら幸いです。どうぞ宜しくお願いいたします。

海外便り Ohio State University

病態解析学分野 助教 松尾 淳司

2009年8月より、オハイオ州立大学(米国)のあるコロンバスに滞在して、早いもので1年以上が経ちました。本稿では、私がこの1年間で経験いたしました、こちらでの生活の様子を一部ご紹介したいと思います。

コロンバスは、日本からですとシカゴより飛行機を乗り継いで約1時間程度南東へ行った所にあります。オハイオ州にはコロンバス以外に、クリーブランドやシンシナティといったメジャーリーグベースボールチームをもつ都市があります。コロンバスはオハイオ州の州都ですが、札幌と比べますと田舎町という印象を受けております。例えば、コロンバス市内には貨物以外の電車は走っておらず、そのため車が主要な移動手段となる点がそうです。ただ、COTAというバス(1回1.75ドル、お釣りはできません)がコロンバス市内を網の目のように走っておりますので、車がなくても十分に生活することができます。またコロンバス近郊には日系企業がありますので、ダブリンなどコロンバス周辺地域には日本人が沢山住んでいるそうです。そのため、コロンバス市内にもいくつかの日本食レストランや食料品店があり、日本の食材は比較的苦労することなく手に入れることができます。実際、私が訪れる日本の食料品店には、大学からバス一本で行くことができます。したがって、コロンバスは海外で初めて生活をする日本人には比較的住みやすい環境ではないかと思われま

す。コロンバスの気候は札幌に比べて、夏は暑く、冬は寒いという印象です。ただ降雪量は札幌よりはるかに少ないため、車道が雪で覆われるのは年に数日ほどしかありません。

オハイオ州立大学はコロンバスの中心部より少し北側に位置する全米でも最大規模の総合大学として知られております。大学独自の空港を持つことや、学生数が全キャンパスで6万人以上いることなどは日本の大学ではあまりお目にかかれないことでしょう。またオハイオ州立大学は北海道大学と大学間協定を結んでおりますので、北大生にとっても比較的身近な海外の大学といえるかもしれません。

こちらに来てまもなく、カレッジフットボールのシーズン(9月~11月)に突入いたしました。オハイオ州立大学は、カレッジフットボールの強豪チームとして知られ、毎年シーズンになりますと沢山のフットボールファンが応援に駆けつけてきます。ホームゲームの日には試合の数時間前から大学周辺のいたるところに交通規制が敷かれ、フットボールゲーム専用の有料駐車場となってしまう。写真1は、大学構内にあるオハイオスタジアムで、約10万人の観客を収容することができます。今シーズンは、Bowl Championship SeriesのBowl Game(各カンファレンスの成績上位のチーム同士で行われる試合)の1つである Sugar Bowl に進出することが決まっております。



(写真1)大学構内にあるオハイオスタジアム

私は現在、Department of Veterinary Biosciences, Collage of Veterinary Medicine の Dr. Rikihisa Laboratory に所属しております。本研究室では、単球や顆粒球といった免疫系の細胞に感染をする *Ehrlichia chaffeensis* や *Anaplasma phagocytophilum* というリケッチア(細菌の一種)を対象として研究を行っております。これらリケッチアはダニ媒介性の感染症を引き起こし、米国では年間数百例が報告されている重要な感染症の1つで、例えば2008年には各々約1000例の症例が報告されております。しかしながら、日本においては未だヒト症例が報告されておりませんので、みなさんにとってあまりなじみのない細菌かもしれません。ただ野生動物などからは、日本においてもその存在が確認されておりますので、近い将来にヒト症例が報告される可能性は十分にあります。

写真2に、ラボメンバーで撮った写真を示します。こちらの写真を見てお分かりになりますように、ラボメンバーは米国、インド、台湾、中国、日本、バングラデッシュと様々な国・地域から集まったメンバーで構成されております。また、年齢が比較的近い者同士が集まっているということもあり、学生時代に戻ったような感覚を思い出しながら、毎日過ごしております。



(写真2)ラボメンバー

最後になりましたが、このような機会を与えてくださりました、小林研究院長をはじめ、病態解析学分野の先生方、また滞米中の諸手続きを快くお引き受けいただいております事務室の皆様方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

保健学科学友会“クリスマスのつどい”を終えて

保健学科学友会クリスマスのつどい実行委員長 看護学専攻3年 菅野 未佳子

北海道大学医学部保健学科学友会のクラス代表委員が主体となり開催する“クリスマスのつどい”も、今年度も無事終えることができました。

この実施主体である学友会は、学年、専攻を超えた学生及び教員相互の親睦と交流を目的に、1983年に設立されました。現在行われている“クリスマスのつどい”の前身となった“医短冬祭り”は、1984年に第1回が開催されました。当時は、カルタ大会、カラオケ大会、雪上綱引き大会、雪中宝探し等が行われていました。特に宝探しでは、探しきれなかった宝物や、実施中に無くしてしまった靴等が、3月の融雪期に発見されるというエピソードもあったそうです。その後、1998年に“第1回医短クリスマスのつどい”が開催され、現在のような形式となりました。

さて、今年度の“クリスマスのつどい”は12月22日に行われ、会場となった医学部保健学科6階会議室にはたくさんの学生、教員の方々に来てもらいました。

私たち委員は開催の約1ヶ月前から、会場全体をクリスマス一色に飾りつける装飾係、来場した方々に楽しんでもらえる企画を考えるゲーム係、当日のケーキや軽食等の準備を行う食品係の3つの係に分かれ、準備を進めてきました。買出しも委員が中心になって行い、特に食品係では、スーパーのレジカート4台分にぎっしりとつまったお菓子、飲み物等を買いました。会計後渡されたレシートは、普段見ることが出来ないくらい長く、笑ってしまいました。

そして、当日は開催の4時間前から準備を行いました。普段は机と椅子が並んでいるだけの殺風景な会議室も、委員の協力によって飾り付けられていき、華やかな会場が作られました。時間前は来場者がまばらで少し不安でしたが、開催時間近くになると多くの方が来場して一安心し、とてもうれしく感じました。



かわいいサンタとトナカイ？



参加者一斉のクラッカーで「クリつど」スタート！

サンタ服に着替えキャンドルを持った委員が、クリスマスソングの響く会場に入場し、保健学科長である小林先生の挨拶の後、「Merry Christmas!」の言葉と同時に、来場者にクラッカーを鳴らしてもらい、クリスマス会が開始されました。

今年は音楽だけでなく視覚的にも楽しんでもらえるよう、クリスマスの映像を流すなどの工夫を行いました。そして食事の後には、今回のメインイベントである“ビンゴ大会”が開催されました。例年のビンゴ大会では、早くビンゴになった人に豪華な景品が当たる仕組みでしたが、今年はビンゴになった人にはくじを引いてもらい、それに書かれた景品が当たるといように、ルールを変更しました。PlayStation 3、Wii、iPod nano など、例年よりとても豪華な景品であったため、ビンゴになった時の喜びの声と、狙っていた景品が当たらず笑ってしまう声などが聞こえ、会場全体が大いに盛り上がりました。

保健学科の学生は、授業数も多く、実習や研究など忙しい日々を送っていると思います。その中で、今回の“クリスマスのつどい”のように日々の生活に潤いを与えてくれる行事、また学年や専攻を超えて、学生及び教員が一緒に楽しめる行事がとても大切であると感じました。

最後になりましたが、協力してくださった教職員の皆さん、委員でなくても準備や片付け等の手伝いをしてくれた学生の皆さん、ありがとうございました。今後もこの行事が、学生及び教員が楽しめるものとして継続されていくことを心より願っています。

北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト 保健科学院から4名が受賞!

サステナビリティ・ウィーク2010の行事のひとつとして、「第2回北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト」が開催されました。本コンテストは、学生が今取り組んでいる研究を「持続可能な社会づくり」という観点から捉え直し、研究分野の異なる人に分かりやすく伝えるよう推奨するものです。全学から76チーム(93名)が参加し、口頭発表の後、審査が行われ、保健科学院から下記の4名の方が受賞されました。

受賞された皆さんの感想を紹介いたします。



受賞者の皆さん

●北海道大学総長賞(最優秀賞)

博士後期課程1年 高島 理沙 さん

「How disabled people live in a rapidly ageing society?」

全く違った分野を専門にしている学生や教員の方々に自分の研究発表を聞いていただき、さらに評価していただけたということ大変嬉しく思っております。また、コンテストに参加するにあたって、「持続可能な社会」という新たな切り口で自分の研究していることを見つめ直すことができ、自分の研究を生かす新たな可能性の発見にもつながりました。賞をいただけたということに励みにして、今後も研究を続けて行きたいと思えます。

●未来の開拓者賞

修士課程2年 井上 貴雄 さん

「An efficacy of a support program for pervasive developmental disorder patients in adolescence」

学会では同じ専門分野の人との討論のみでしたが、新しい心理社会的な支援を構築していく際には様々な専門領域の人々との協業が必要になることが予想されます。そういった意味からも今回のポスターコンテストでのディスカッションは貴重な経験となりました。指導教員である傳田健三先生のもと、進めることができた研究ですが、今回の受賞は今後の研究の励みになりました。更に精進し、青年期の発達障害者に対する包括的な支援方法確立への一助を担えるよう頑張りたいと思えます。

●グッドコミュニケーション賞

修士課程1年 萩野 泉 さん

「Growth and nutritional status of “Pygmies’ hunter-gatherers” children in South-East Cameroon」

まず、今回の発表に際して様々なアドバイスを頂いた人類生態学研究室の山内先生、ラボのメンバーに深く感謝の気持ちを申し上げます。アフリカ大陸に住むピグミー系狩猟採集民という、あまり一般に広く知られていないテーマを扱っている中で、自らの研究成果を聴衆に伝える部分を評価していただいたことを、とてもうれしく思います。これからも、自らの研究を積極的に人に伝えていくことを大切にして研究にかかわっていきたいと思えます。

●魅力あるポスター賞

修士課程1年 植村 あずさ さん

「Child obesity is prevalent in developing countries !」

普段自分が取り組んでいる研究に関して、様々な分野の学生や先生方とディスカッションすることができ、新たな問題意識を持つ契機となりました。学会発表とは異なった趣旨でポスターを作成するにあたり、専門分野以外の人でも理解できる“分かりやすい魅せ方”には大変悩みましたが、指導教員の山内先生をはじめ、研究室メンバーの協力を得て、納得のいく形に仕上げることができたと思えます。今回頂いた評価を励みに、今後も自分の研究に真摯に取り組んでいきたいです。

保健科学院博士後期課程設置記念行事を開催

平成22年4月1日に大学院保健科学院博士後期課程が設置されたことを記念して、平成22年9月17日（金）に学術交流会館において、講演会、式典、祝賀会を開催しました。

記念講演会では、日経BP社医療局主任編集委員の宮田満氏を講師に招き、「保健科学・健康科学への社会的要請」と題して、ご講演をいただきました。

引き続き行われた記念式典・記念祝賀会では、文部科学省、道内大学及び専門学校、各種団体、関係企業、並びに北海道大学関係者等、約110名が列席され、多くのご祝辞、ご支援をいただき、盛会のうちに終了しました。



式典で挨拶する小林保健科学院長

平成22年度（第4回）北海道大学医学部保健学科長賞表彰式を挙

平成22年9月9日（木）、会議室において「北海道大学医学部保健学科長賞」表彰式が行われ、保健学科の教員が列席のもと、小林保健学科長から被表彰者5名に、賞状および記念品が贈呈されました。

この表彰は、医学部保健学科4年次に在籍する学生で、特に優秀な成績を修め、他の学生の模範となると認められた方へ授与されるものです。

このたび下記の方々表彰を受けられました。

看護学専攻	金子 真弥さん
放射線技術科学専攻	富山 勇輝さん
検査技術科学専攻	三谷 麻子さん
理学療法学専攻	泉 達弥さん
作業療法学専攻	宮島 真貴さん



記念写真

サステナビリティ・ウィーク2010参加企画
シンポジウム「子どもの未来可能性を大切にする社会の実現をめざして」を開催

日 時	平成22年11月2日(火)13:00~15:00
場 所	学術交流会館小講堂
参加者	152名
座 長	創成看護学分野 教 授 佐伯 和子
講 演	創成看護学分野 准教授 山内 太郎 「肥満化・体力低下時代を生きる子どもたちへの未来処方箋 ーアジアと日本の子どもの体格とフィットネス」
	生活機能学分野 教 授 傳田 健三 「子どものうつ病と発達障害」
	創成看護学分野 助 教 本田 光 「文化的営みの中で行う子育てと地域の絆」
	農学研究院/生命科学院・女性研究者支援室室長 教 授 有賀 早苗 「子どもの立場で考える男女共同参画社会」



シンポジウムでの質疑応答の様子

サステナビリティ・ウィーク2010参加企画
保健科学研究院公開講座「ようこそ!ヘルスサイエンスの世界へ」を開催

日 時	平成22年11月3日(水)13:00~16:00
場 所	保健科学研究院会議室
参加者	102名
講 演	病態解析学分野 教 授 森山 隆則 「フードファディズムと健康食品について ーあなたはメディアに惑わされていませんか?ー」
	機能回復学分野 教 授 福島 順子 「発達障害のニューロサイエンスー相手の感情を理解する脳ー」
	生活機能学分野 教 授 八田 達夫 「車いすから見える座りの世界 ー車いすのシーティングの進歩とオフィスチェアへの応用」



過去最高の参加人数となった会場の様子

ひらめき☆ときめきサイエンス～KAKENHI 「身の周りの細菌を見てふやして感じてみよう!!」

病態解析学分野 教授 山口 博之

日 時	平成22年12月5日(日) 12:30～17:00
場 所	保健科学研究院第一実習室
参加者	22名
プログラム	<p>科学に興味を持ちその研究領域に足を踏み入れる学生が極めて少なくなってきたことは、科学の将来にとってゆゆしき事態であり、抜本的な解決策を速急に見いださなければなりません。そこで、細菌学を通して科学への興味を次の世代を担う若者にぜひ持ってもらいたいという強い願いから、本研究院では高校生を対象とした日本学術振興会主催実験プログラムを実施しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開会式(オリエンテーション) ・講演「ようこそ不思議な細菌の世界へ！ー身の回りの細菌達ー」 ・事前安全教育 ・実験1 ・実験2 ・グループ発表会、質疑応答 ・閉会式(未来博士号授与式)



グループに分かれての実験風景

保健科学研究院研究助成制度対象者(平成22年7月～平成23年1月)

分 野	職 名	氏 名	備 考
創成看護学	准教授	山内 太郎	
病態解析学	教 授	千葉 仁志	
病態解析学	助 教	松尾 淳司	
病態解析学	教 授	山口 博之	3編
病態解析学	教 授	石津 明洋	
機能回復学	教 授	福島 順子	

※研究助成制度

対 象： (1) 英文原著論文(査読有、IF有、first author)を執筆した教員
 (2) 英文原著論文(査読有、IF有)のcorresponding authorとなった教員
 (ただし、(1)に該当する論文のcorresponding authorとなった教員は除く)

助成の方法：論文1編につき10万円の研究費を対象教員に配分

小樽商科大学大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻 「大学院連携によるMBA特別コース」入学志願者の決定

平成22年12月16日(木)開催の保健科学院教授会において、平成23年度の小樽商科大学大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻「大学院連携によるMBA特別コース」入学志願者として、下記の3名が決定しました。

所属学科目	氏名	指導教員
健康科学	鈴木 哲平	小笠原 克彦
健康科学	関 裕司	小笠原 克彦
リハビリテーション科学	桑島 大輔	村田 和香

研究助成採択状況(平成22年7月～平成22年12月)

【上月スポーツ・教育財団「スポーツ研究助成事業」】

機能回復学分野 助教 寒川 美奈

「スタティクストレッチング及びダイナミックストレッチングによる効果的ウォーミングアップ方法の検討」

受賞状況(平成22年7月～平成22年12月)

【第20回日本産業衛生学会産業医・産業看護全国協議会 日本産業衛生学会産業看護部会ポスター優秀賞】

創成看護学分野 准教授 河原田 まり子

「民間企業の労働者を対象にしたストレスマネジメントプログラムの効果」

【第26回緒方富雄賞】

病態解析学分野 教授 森山 隆則

「臨床検査領域の技術を通じて医療の発展に著しく貢献した業績に対して」

【日本デザイン学会年間作品賞】

生活機能学分野 教授 八田 達夫

「オフィスチェア「パルス」のデザイン」

【第61回日本電気泳動学会奨励賞】

博士後期課程1年 田村 彰吾

「Major royal jelly protein 1 (MRJP1) oligomer構成低分子蛋白質Apisiminの分子特性解析」

人事異動

平成22年10月1日

(採用) 大橋 友香 医学系事務部総務課事務職員(教務担当)

平成22年10月8日

(任期満了) 松原 和美 医学系事務部総務課事務補助員(庶務担当)

平成22年11月1日

(採用) 惠 淑萍 病態解析学分野特任准教授

平成22年11月16日

(任期満了) 綾女 朋美 病態解析学分野技術補佐員



広報誌の名称 「プラテュス」の由来

保健科学研究院の玄関前には、大きな二本のプラタナスの樹があります。古代ギリシャの医者ヒポクラテスは、プラタナスの木陰で弟子たちに医学を説いたそうです。大きな広い葉をもつプラタナスは、ギリシャ語で「広い」を意味するplatys(プラテュス、ギリシャ語では「πλατύς」と記す)に、その名が由来するとされています。本研究院が幅広い分野の専門家の集まりであることから、このプラタナスの語源になぞらえて「プラテュス」と命名しました。

広報室 (編集委員)

伊達 広行(広報室長)
山内 太郎
横澤 宏一
小野塚久夫
境 信哉
渡辺 玲奈
菊池 洋美(事務)

発行 北海道大学大学院保健科学研究院広報室
〒060-0812 札幌市北区北12条西5丁目
連絡先 庶務担当
電話 011-706-3315
E-mail shomu@hs.hokudai.ac.jp
URL <http://www.hs.hokudai.ac.jp>